

2022年度 個人研究実績・成果報告書

2023年 4月 24日

所属	基盤教育機構	職名	教授	氏名	行名 則子
研究課題	日本人学生（日本語母語話者）への「文章表現」と留学生への「日本語教育」の相互作用（4）				
研究キーワード	相互評価活動 論理クイズ	当年度計画に対する達成度	3.概ね順調に研究が進展し、一定の成果を達成したが、一部に遅れ等が発生した		
関連するSDGs項目	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	

1. 研究成果の概要

論理的な文章を書くために、どのような練習をすることが有効かについて、初年度からテーマを決めて実験を重ねてきた。今年度は以前からレポートの練習に一定の効果があると以前からいわれている「相互評価活動」を「論理性の高さ」の具体化とともに実践する。

大学の方針（学生全員がPCを持参する）と、2020年からのCOVID19によるオンライン授業の実施などから、PCを使用して受講生との **interaction** をとることが日常になった。しかし授業の目的が学生個人の文章作成能力の向上である場合、映像・音声を用いてグループワークを実施することは必ずしも適切とは限らない。とはいえ安定してきたオンラインのシステムを利用しない手はない。PCを利用した双方向性（受講生と個人的につながるができるようになった）を利用して学生のモチベーションや課題の完成度の向上を目指すための工夫ができるのではないかと考えた。

そこで受講生の作成した文章をオンライン上で相互に閲覧しコメントを付与する仕組みを構築し、運用することの実験を試みた。当初すべての受講生の作成した文章をシャッフルし、与えられた文章それぞれにコメントをしてもらうことを考えた。課題として Teams に upload した文章資料を文章作成時に学生に提示している Rubric をもとに相互評価するというものである。開始するにあたってクラス人数（80人×4クラス）を考えると管理と処理に不安があった。しかし、人数が多い受講者の課題を毎週添削していくことの問題点（毎回の添削は物理的に不可能）を解決する意味でも相互評価システムを構築することは重要である。

この分野の先行研究には相互評価が授業の進行に与える影響に注目した高木他（2007）情報処理学会、相互評価の正確性についてのグエンドクティエン他（2018）電子情報通信学会、などがある。さらに田中（2021）埼玉工業大学などの先行研究を踏まえ、二つの評価項目、相互評価の正確性と学生のモチベーションの向上、のうち、今回は相互評価の正確性に注目することとして実験を始めた。

課題を指示された学生は提出締め切り日までに Teams に文章を upload する。提出締め切り前であれば何度でも修正したものを再提出できる。自身の文章は Rubric を参考にして提出する前に自己評価することができる。

その後、他者の文章を Rubric に照らし合わせて評価する。本来の目的は多人数の文章を毎回丁寧に評価することを可能にするものであるが、実験は一部の学生に依頼して実行してもらった。システムの構築が上手くいかなかったため、全体で実験して学生を不安にさせることのないようにするためである。

実験結果は Rubric を詳細なマトリックスにすることで学生の相互評価と教員の評価の方向性との間にほぼ差がないことが確認された。ただし学生同士の間での相互評価の方が教員の評価よりも少し甘い傾向はあった。それは自分が評価する文章がクラスメートのものであることを考えると予測できる誤差であるといえるであろう。このことは自己の文章の評価にも表れている。教員の評価より高い評価で推移した。評価の基準が同じでも教員の考えるものと学生の考えるもの間には文字には現れない基準の差のようなものがあるのかもしれない。当初の予測では学生の自己評価の方が教員の評価よりも低く推移するのではないかと想定したが、結果は逆で

あった。成績評価に対する学生の不満、というものもこうしたところから発生する可能性もあると考えさせられた。

こうした問題を解決するためにはインフォームドアセスメントの形成を考えなければならないだろう。特に論理性の高さについては初年次の学生では判断しにくいことも多い。評価項目の中で抽象的でわかりにくい項目については、文章を書いてもらう前にしっかりと確認しておく必要がある。論理性についての学生の評価については、どのように評価したかを尋ねると「なんとなくずっと頭に入ったから」などの感覚的な評価になっている。評価に関する項目を学習目標の達成につなげ、学生と共有することを丁寧に行わなければならないということを改めて考えさせられた。

すぐれた成果物の特徴は何か、発揮させたいスキルは何か、なども具体的に説明しておく必要があるだろう。あくまでも具体的な評価ポイントを提示することで、学生と教員の評価の齟齬はさらに減少するであろう。

アクティブラーニングの重要性が謳われ、能動的な学習を通じた主体的な学びが協調される時代に「何を学んだか」がはっきりとわかるような「教育効果の可視化」によって学生の自己評価とその結果に基づいた自己調整が可能になるであろう。

今回はひとりに一つの文章を評価してもらう形式をとったが、ひとりに複数の文章を評価してもらうことで評価される側の評価の偏りを避けることができること、評価する側の評価の上達が期待できるのではないかと考えている。次回以降の実験ではこうしたことも視野に入れていきたい。そのためには複数人の学生から評価されるような、複数人を評価するようなシステムを作ることが必要である。相互評価活動を実施し、他者を評価する経験を積むことで、自己評価力が高まる可能性も期待できる。

今回の実験では、相互評価のためのシステムを構築することが目標であった。しかし Teams をうまく使いこなすことができず、評価者の割り当て管理・通知などをおこなう相互評価のためのシステムは構築できなかった。結果的に相互評価のシステムの情報処理の部分をおざなりにしてしまった。藤原他（2008）情報処理学会によれば繰り返し評価をすることで具体的なコメントが増加するとされており、システムの構築ができれば「繰り返し」も可能になったであろうと推測する。評価項目だけでなく、コメントも記入できるようにするとより効果が高いかもしれない。

2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

なし

【著書・論文（査読なし）】

なし

【学会発表等】

なし

3. 主な経費

電子書籍・書籍などの資料、主にリモートで行われた学会のためのパソコン周辺機器など。

学会費

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

なし